



- 体育会名:関西学院大学体育会山岳部
- 創部年:1920年(大正9年)
- 2025年度会員数:3人(4年0人、3年0人、2年2人、1年1人)

- 同窓倶楽部名:関西学院大学体育会山岳部同窓倶楽部  
\* 関西学院同窓会 公認団体
  - 同窓倶楽部通称:関西学院大学山岳会
    - 設立年:1921年(大正10年)
    - 会員数:243人(男性227人、女性16人)
- \* 物故者含む

山岳部にとって1920(大正9)年の創部から24年までの「原田の森時代」は、裏山とも言うべき摩耶山や六甲山に気軽に出かける登山活動から、スポーツアルピニズムに基づき「より高き、より困難」を目指す本格的な登山活動への転換のための揺籃期であったと捉えることができる。

活動範囲も六甲山系中心から北アルプスや南アルプスへと広げられ、さらに26年4月より、RCC(Rock Climbing Club:1924年、藤木九三らによって神戸市で設立された先鋭的な岩登りをすることを目的としたクラブ。技術水準と教育指導を重要視した日本初の本格的な岩登りのクラブであり、日本の岩登りの歴史の起点となった)の藤木九三氏らの指導を受け、岩登りが活動に組み込まれたことも、その動きに拍車をかけたと思われる。

以下、上ヶ原移転後の主な活動を、年代を追って記す(主に「DAS EDELWEISS XVII 山岳部 80年史」より引用)。

29年は部運営の路線として「より高きへ」を推進。3月の原田の森から上ヶ原への学院の移転に伴い、5月から仁川溪谷の岩場をゲレンデとして岩登りの練習が開始された。北アルプスでの岩登りの取り組みも、前穂高岳北尾根、劔岳八ツ峰から始まった。一方、積雪期の登山にはまだ手がつけられない状態であった。

30年に集中登山形式が初めて取り入れられた。学院移転第1回の記念祭で「山岳映画の会」が開催された(上映作品:「雪国巡礼」「1月の乗鞍岳」「山の危難」「マッターホルン征服」)。

31年3月、白馬岳主稜に初登攀(秋山・田中(神戸商大))。11月末、「山と映画の会」開

催(上映作品:「白の芸術」「銀界躍進」「雪の樂園」「春の立山」「銀嶺を行く」「氷室の殿堂」)。また春に機関誌発行を主とするという形でOB会が発足した(正式発足は35年7月)。

32年大学昇格認可。スポーツアルピニズム徹底を目指し、①チーフリーダーシステムの確立、②各個人の技術向上のための練習強化、③研究会・合宿準備会の充実、④ヒマラヤの研究、⑤スキー・スケート部の分離、⑥山岳会の発足、への取り組みを開始。個人的なものから、集団による目標を定めての合宿形式の山行形態が確立し、夏の合宿は集中登山一定着合宿方式が採られる。

34年3月から36年3月の積雪期3季に、計5度(3月、12月)にわたり積雪期劔岳西面へ挑み、5度目にしてチンネ正面ルンゼ初登攀(塩津・鷺池)、小窓尾根～三の窓～池の谷の縦走に成功した。この間の35年7月にはOB会「関西学院山岳会」が発足した(会長:橘真琴氏)。

37年12月、早月尾根にて部創設以来初の遭難事故が発生。38年5月に報告書発行と、慰霊碑建立・除幕式が行われ(碑面揮毫:藤木九三氏)、39年に追悼集が発刊された。

39年7～9月に台湾中央山脈シンカン山(3381m)～新高山(3950m)を縦走(浅野・大橋)。40年3月、杓子岳東壁A尾根に積雪期初登攀(浅野・小倉・永野)。鹿島槍ヶ岳北壁中央ルンゼ第2登(小倉・井上)を果たし、夏には白頭山縦走計画偵察を行った。

41年、戦時体制強化のため、学生部運動部山岳部から報国団鍛錬部山岳部に名称変更。5月、2隊出発後に文部省より以後計画中止の通達が届いたが、学院から劔岳まで徒歩による登頂を達成(井原)。

同年12月8日、太平洋戦争が始まる。山岳部は42年3月穂高岳、5月鹿島槍ヶ岳荒沢南陵(井上・山本)、夏には劔岳等へ山行。一方で43年にかけて、「雪洞」「ビバーク」「装備」等の技術研究を盛んに行い、軍事教練が強化されたとある。

43年の活動は鹿島槍ヶ岳信州側トラバース(井上以下4人)～白馬岳～針ノ木岳:後立山全山縦走(井上・小山)、遠見尾根～カクネ里～天狗尾根～鹿島槍ヶ岳往復～荒沢～東尾根～鹿島槍ヶ岳往復～遠見尾根、柵池小屋～白馬岳～唐松岳～針ノ木小屋～大町など。

報告書に「決戦下の日本の…スポーツアルピニズムの全面否定…[山を通じて祖国のために]敢然と起つべきである」の記載がみられる。

5月には大学予科体育班の岩登り講習。7月には文部省から戦技としての登山・行軍そして一般学生の錬成指導を山岳班班員の使命として要求。部の名称を体練部戦技訓練科行軍山岳班と改めた。科長に陸軍大佐、班長に中尉が就任。劔岳「大学予科学練部体育班錬成登山」：弘法小屋～乗越小屋～劔岳～早月尾根～馬場島が行われ、大学より山岳班の存在価値が評価される。夏山は池ノ谷合宿。10月に徴兵猶予が停止され、学徒出陣令。11月に戦技登山研究会(穂高岳)、12月に出陣壮行登山(富士山)と時代は進んでいった。

44年5月、ついに学徒動員。部員は軍需工場配属となり、日常の部活動を休止するも、7月に上田以下4人が劔岳、山口は徳本峠～涸沢～槍ヶ岳へ。45年の終戦とともに勤労働員は解除され、部員が次々復員したが、戦死者もあった。

46年、夏合宿を再開し立山～槍ヶ岳を縦走。冬山は遠見尾根～天狗尾根(失敗)。47年、学制改革で順次新制大学へ切り替え。春に天狗尾根～鹿島槍ヶ岳へ。48年7月には鹿島槍ヶ岳北壁中央ルンゼ第3登(井上・山本・永野/片山・植田)と活動は活発化し、49年を迎える。

この年3月12日から4月9日まで行われたのが「後立山国境線極地法登山」：梅池～白馬岳～唐松岳～鹿島槍ヶ岳(往復は断念)だった。時報 No.21に藤木九三氏(朝日新聞社)による総括「今回の…計画において戦後最大水準のものとして各方面の注目を浴び…一ヶ月にわたる国境線上の起居はそれだけで十分新記録としての価値があり…天候不順のため敗れたが、結果においてはむしろ成功以上の貴い経験であり、わが国アルピニズム史上に特に記録すべきである。」と記載された通り、当時として画期的な試みだった。

翌50年、前年に初めて極地法に挑んだ影響か、部は物心両面のエネルギーの消耗による約1年間の虚脱状態の後、①現役のみ、②安全第一で初歩から、③新入部員獲得・訓練、を活動の主とする方針を立てる。資金獲得のためのアルバイト(山小屋・測候所への荷揚げ、球場でのキャンデー販売など)に励み、夏は劔定着～祖母谷～唐松岳～針ノ木岳、冬山は

遠見尾根～鹿島槍ヶ岳に極地法で挑む(五龍岳で撤退)。

51年から53年にかけては、夏は劔岳定着～槍・鹿島槍・針ノ木への縦走。秋は偵察/荷揚げ。冬は白馬岳、五龍岳周辺、春は早月尾根～劔岳で活動。合宿は学生主体となる。52年夏には八峰キレットにて部として2件目の遭難事故。54年は春山にて初の黒部横断:遠見尾根～五龍岳～東谷尾根～仙人ダム～雲切尾根～池ノ平～小窓～三の窓～劔岳～早月尾根～馬場島に成功。55年春に極地法による後立山縦走へ再挑戦するが、唐松岳で撤退。56年春、極地法による後立山縦走への再々挑戦で、白馬岳～鹿島槍ヶ岳南峰を往復し、積年の宿願を果たした。

以後、この年の日本山岳会のマナスル(8163m)登頂の影響もあり、部員は30人を越え「一層先鋭的な登山」が目標となった。従来の極地法による稜線の山行から、バリエーションルートによる岩壁登攀により高い価値が置かれるようになり、夏山合宿の岩場では継続登攀が試みられ、積雪期の合宿も春山から冬山へ重点が移されていった。この傾向は部として3、4件目となる遭難事故が起きた64年まで続くこととなった。

この間、夏山合宿終了後、学院体育授業の一環として、米田満教授率いる一般学生を劔岳に案内するのも慣例であり、大学当局から山岳部が高く評価される一面もあった。

57年春、鹿島槍ヶ岳東面(冷沢 BC)。58年1月、滝谷第2尾根、A沢。3月には中崎尾根～北穂高岳～西穂高岳往復。59年1月、赤岩尾根・小窓尾根・早月尾根～劔岳を計画したが、遭難救助で中断。3月に知床半島全山(羅臼岳～知床岬)縦走。60年は3月に早月尾根～劔岳、チンネ、ハツ峰、劔尾根上半、12月に小窓尾根～劔岳。さらに「日本ペルーアンデス探検隊」(竹田隊長・麻植・竹内・阿形)として、アウサンガテ南峰(6200m)およびピコ・デ・アロス(6250m)に初登頂した。

61年、「関西学院大学ペルーアンデス探検隊」(川村隊長・藤木・三沢・田中・南井・長井・野村・西村・小川・横山)がワスカラン主峰(6768m)・南峰(6655m)に登頂、カイヤンガテ2峰(5931m)・3峰(5909m)に初登頂を果たした。

62年は3月に毛勝山～赤谷山～劔岳/大熊谷～早乙女岳～奥大日岳～劔岳、12月に

赤谷山～劔岳。63年は3月に蓮華岳東尾根～劔岳／北葛岳～船窪岳～平～立山～劔岳を踏破。64年には「関西学院大学カナダ・ローガン遠征隊」(グレアム隊長・室田・今井・千田・大沼・小西・新村・三戸田)がローガン東峰(6035m)・中央峰(6050m)に登頂。同年9月には、立山美松坂に「山小屋(現、関西学院立山山小屋)」を建設したが、この年、山岳部は部活動そのものの大きな危機を迎える。

3月の春山合宿(鹿島槍ヶ岳牛首尾根)および7月の夏山合宿(劔岳チンネ)で、相次いで遭難事故が起きた。その反省を踏まえ、①チューター制度の確立、②遭難対策(保険加入と対策基金の充実)、③部則の明文化とリーダーの適性考慮を三本柱として、部の再建への取り組みが始まった。「ひとつ間違えば生命にかかわるような部活動を、何故に支持し、もり立てんとするのであるか。私は若人の登高意欲は尊重し、育てねばならないと信じている。それは、細心の思慮と絶大な勇気を涵養してくれる登山活動こそまれにみる人間錬成の手段であるからである。…後略」(川村部長)。

60年代後半に入ると、国民的登山ブームは衰退していった。それに伴う部員数減少によって活動に制約が生じる中、また登山そのものや世の中の価値観が多様化する中、国内では安全第一をモットーとして合宿活動を実践していった。一方で69年にイストル・オ・ナール(7403m、野村隊長・小川・森本・宮崎・中井)、79年にハーディング(現シアピーク、7093m、川添隊長・三田村・林・広岡・平松・吉田・松林 Dr.)、86年にディラン(7257m、八重津隊長・日上・飯田・岩倉・高倉・田中・立石 Dr.)と、いずれもパキスタン・カラコルムの7000m峰に登山隊を送るも惜しくも失敗に終わった。

90年代、さらに部員減少傾向が進む中、98年に「日本山岳会青年部カンチェンジュンガ登山隊」や「日本山岳会学生部ブータンヒマラヤ登山隊」に隊員として若手 OB(大橋)や現役部員(長岡)を派遣するなど、海外登山を継続的に取り組んだ。

2000年代に入り、部員数減少はとどまらず、部員のいない学年も出てきた。その中でも劔岳での夏山合宿や北アルプスでの冬山合宿など、高いレベルでの登山技術を継承してきた。

その努力は実り、06年に「日本山岳会学生部ヒマラヤ遠征隊」に現役部員の中島が参加し、

パンバリヒマール(6887m)を初登頂した。そして現役部員、チューター、部長によるヒマラヤ研究会を立ち上げ、07年ネパール・ヒマラヤの未踏峰ディンジュンリ(6196m)に現役部員3人(中島・出本・田中)で挑み6132mまで到達。翌08年に現役部員2人(中島・山本)が初登頂する快挙を成し遂げた。

中島は卒業後も17年のシスパーレ(7611m)北東壁初登頂、18年エベレスト(8848m)北稜登頂、19年ラカポシ(7788m)南壁初登頂、23年ティリッチミール(7708m)北壁初登頂など数々の輝かしい実績を残し、登山界のアカデミー賞とも呼ばれるピオレドール賞を3度受賞したが、24年、K2(8611m)西壁を登攀中に滑落、帰らぬ人となった。

09年には、日本山岳会学生部の「パンポチェ峰(6620m) & サムド峰(6335m)登山隊」へ現役部員(山本)、同「日中韓三国学生登山 玉殊峰(6178m)」へ現役部員(辻)がそれぞれ参加し、サムド峰初登頂と玉殊峰登頂を成し遂げた。

山本は卒業後も16年カンナチュゴ(6735m)南壁初登頂、18年ゼロ・キシウトワール(6200m)北東壁初登頂、24年フォレンソビ(6652m)北壁初登攀など、現在も登山界の第一線で国内外における山岳活動を続けている。

しかし、09年の海外登山での実績も部員の卒業と共に、再び部員数減少の時代が訪れることとなった。上級生部員が不在の時代もあり、新入部員の指導育成をチューターが行い、合宿などの山行においてもチューターが入れ替わりで参加し、山岳部としてのレベルの維持に努めた。

10年代は合宿自体が現役部員のみでの実施が難しくなり、ますます海外登山から遠ざかっていた。19年、山岳部創部100周年を迎える前年に、100周年記念登山として、チベットヒマラヤのガウリシャンカール峰(7134m)へ現役部員(久保田)とOB(中島)が、2人でベースキャンプまでの視察登山を行った。

しかしながら、山岳部創部100周年となる2020年より、世界中がコロナ禍に見舞われ、海外渡航も難しい状況となり、計画を断念することとなった。さらに国内の山岳活動にもコロナ下における様々な制限が加わり活動継続の危機にも見舞われた。

24年春には現役部員の卒業により、完全に部員がゼロとなったが、OB主導で新入部員の勧誘活動を行った。OBの中島による講演会を学内で開催し、その講演会に出席した新入生が1名入部するに至り、チューターによる指導育成を年間通じて行うことで、山岳部としての活動を継続することができた。秋からはマネージャーも1名加わり、25年に1名の新入部員を迎えた。現役部員が2学年で3名体制となり、再び現役部員だけでの合宿や山行を行える状態に戻ってきている。

われわれ山岳部は国内では伝統的に劔岳などでの岩登りを中心に行い、夏冬を問わず挑戦を繰り返しており、これまで幾多の記録を残している。現在も部員は少数ではあるが、基礎訓練を重ね安全第一を旨とし、これからもより高さより困難を求め活動を続けていく。

山岳部 部史 編集担当者

大橋隆平(H9年 社会学部卒)